

# 通所介護施設における要介護高齢者の就労的活動のサポート体制と効果

– A-QOAによる従来のレクリエーション活動との比較 –

## SUPPORT SYSTEM AND EFFECTIVENESS OF WORK-RELATED ACTIVITIES FOR THE ELDERLY NEEDING CARE IN A DAY SERVICE FACILITY

– Comparison of traditional recreational activities by A-QOA –

尤 琏 琦<sup>\*1</sup>, 三浦 研<sup>\*2</sup>

*Kunqi YOU and Ken MIURA*

This study investigated the organization, support system and effectiveness of work-related activities compared to recreational ones in a day service facility for the elderly using the Assessment of Quality of Activities. The findings are as follows: First, the majority of participants in these activities are the elderly who require care and have dementia. Second, diverse options and support are necessary for the elderly with varying interests and physical conditions when managing work-related activities. Third, work-related activities are more effective than recreational ones. The effects of work-related activities are more significant for the elderly with poor physical and cognitive functioning.

**Keywords :**Elderly care facilities, The elderly needing care, Work-related activities, Support system, Activity effectiveness, Quality of Activities

高齢者介護施設, 要介護高齢者, 就労的活動, サポート体制, 活動効果, 活動の質

### 1. 序論

2018年に厚生労働省は介護サービス利用中の要介護高齢者の社会参加などの就労的活動<sup>注1)</sup>を一定の要件<sup>注2)</sup>で認める方向性を打ち出し、2021年には通所介護における利用者の社会参加が努力義務とされるに至った<sup>注3)</sup>。要介護高齢者の就労に関する研究には、介護施設における高齢者の就労的活動の全国の取組状況、運営上に必要な地域資源、就労的活動の実施状況や事業課題について、分析した筆者の既報<sup>1)</sup>、認知症高齢者が働く飲食店を対象に就労を可能にする平面計画における配慮すべき要素を提示した川本らの研究<sup>2)</sup>、介護施設における高齢期の就労は、高齢者のQOLの向上において重要な役割を果たす可能性を指摘した伊藤らの研究<sup>3)</sup>がある。また、福祉分野では、介護施設での就労的活動を支援するため、多様な立場の関係者が協働し、高齢者が生きがいを感じられる環境を創出することの重要性を指摘した永井らの研究<sup>4)</sup>がある。しかし、これまでの研究が主に元気な高齢者の就労<sup>5-6)</sup>を対象とした一方、要介護高齢者の就労は新たな取組であり、福祉分野にも研究の蓄積が少ない。特に介護施設における高齢者の就労的活動の運営やサポート体制の構築方式、従来のレクリエーション活動（以下、レク活動）に比べた効果の相違などについて、研究がなされていない。

そこで、本研究では、就労的活動を取り入れた介護施設を対象として、就労的活動とレク活動のサポート体制や実施効果の比較から、

その取組の有効性を検証することを目的とする。具体的には、介護職員に対する行動観察調査から、就労的活動などの開催実態及びサポート体制を把握する。続いて、高齢者が就労的活動やレク活動に参加する際の活動効果を測るために、作業療法分野で開発された活動の質に関する観察評定法（以下、A-QOA）<sup>注4)</sup>の指標を取り入れ、行動観察調査を実施する。A-QOAは2022年に開発された手法であり、高齢者等の活動を評価した研究は現時点では見当たらず、A-QOAに関連する研究は、関係者による評価法の開発に関する研究<sup>7-8)</sup>に限られている。これまでの建築計画分野における行動観察調査は、個々の研究者が設定した行為分類を用いて実施してきたが、認知症などの自分の意思表現が困難な人に対して、意味や価値のある活動の判断や、活動の効果検討が実施しにくかった。本研究の特徴は、高齢者施設での活動の質を評価するためにA-QOAを活用し、対象者にとっての活動効果を言語化・数値化して分析する点にある。

なお、A-QOAにおける「活動の質」とは、活動と対象者の結びつきの強さであり、活動の遂行や、感情表出、言語表出、社会交流が生む状態、活動の結果から得られる対象者への影響という複合的な要素を観察して判断される対象者の状態像を示すものである<sup>12)</sup>。

### 2. 研究方法

本研究では、2018年に就労的活動を取組み始めた通所介護施設 S

\*<sup>1</sup> 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程・修士（工学）

\*<sup>2</sup> 京都大学大学院工学研究科 教授・博士（工学）

Doctoral Candidate, Dept. of Architecture Graduate School of Engineering, Kyoto University, M.Eng.

Prof., Graduate School of Human Life Engineering, Kyoto University, Dr.Eng.

(定員 35 名) を対象とした (Table1)。調査は 2024 年 1 月 17 日～2 月 28 日までの期間で、就労的活動またはレク活動を開催された日に、合計 23 日間、筆者 1 名で実施した (Table2)。就労的活動に参加した 18 名の高齢者を対象に、基本属性についてのアンケート調査 (調査①) を実施したうえで、高齢者の就労的活動およびレク活動に参加する際の様子と反応、および他者との関係性を比較・評価するため、A-QOA 評定法に基づく行動観察調査を行い、「活動とその人との関係」を示す 5 つの観察視点 (21 項目)<sup>注5)</sup>に基づいて、「高齢者が関与する活動を通じてどのくらい良い状態になっているか」、活動の質について採点を行った (調査②)。なお、筆者は A-QOA の研修を受講し、2023 年 3 月に認定評価者として認定を受けている。これにより、行動観察調査のデータを専用ソフト AqoaPro<sup>注6)</sup> を用いて、数値化 (Probit 値への変換) を行い、就労的活動と従来のレク活動の実施効果を定量的に分析し、評価結果の妥当性と信頼性を高めた。また、行動観察調査では、高齢者の就労的活動を運営する際の介護職員やボランティアの配置、役割についても記録を行った (調査③)。

Table1 調査対象施設の概要

所在地	京都市	構造・階数	鉄筋コンクリート造 地上2階建て
施設種別	通所介護 介護予防通所介護	敷地面積	864.2m <sup>2</sup>
法人種別	社会福祉法人	建築面積	433.5m <sup>2</sup>
開設年月	1999年10月	延床面積	706.5m <sup>2</sup>
定員(名/日)	35	職員数(名/日)	10

Table2 調査概要

調査① 利用者基本属性調査	
調査対象	2024年1月-2月に就労的活動に参加した18名の高齢者
調査内容	性別、年齢、要介護度、FAST <sup>注7)</sup> 、認知症高齢者の日常生活自立度 <sup>注8)</sup> 、疾患名を調査する
調査② 高齢者活動参加時の行動観察調査	
調査対象	調査①の調査対象と同様：就労的活動計44名分、レクリエーション活動計44名分
調査活動	就労的活動(計4種類)、レクリエーション活動(計8種類)
調査内容	活動の始まりから終わりまでに、活動の遂行、活動の結果から得られるその人への影響、感情表出、社会交流が生む状態、言語表出を観察の着眼点として記録する
A-QOA評価	活動ごとに、活動の質を観察するための5つの観察視点(21項目)を用いて、各項目を4点から1点で得点をつける
調査③ 介護職員活動運営時の行動観察調査	
調査対象	各活動に関わる職員13名の計49名分、ボランティア9名の計38名分
調査内容	活動の始まりから終わりまでに、1分毎の滞在場所及び業務内容を記録する

Table3 活動概要

	活動内容	開催曜日	開催頻度	実施場所 <sup>注9)</sup>	個人要望	参加形式	参加規模	活動運営協力者	活動時間(分/回)	観察人数分
就労的活動	刺繍	月	週1回	施設内	○	一人ひとり	3名ほど	地域住民2名ほど	60	8
	刺し子	水	週1回	施設内	○	オリジナル	4名ほど	地域住民2名ほど、芸術大学生3名ほど	60	17
	食堂の下ごしらえ	木	月1回	施設内	○	グループ	5名ほど	-	60	9
	洗車	金	週1回	連携企業内 移動距離: 4.1km	○	グループ	3名ほど	地域住民1名ほど	60	10
レクリエーション活動	書道	不定	不定期	施設内	○	一人ひとり	4名ほど	芸術大学生3名ほど	20	4
	作品展示会	不定	不定期	連携企業内 移動距離: 5.3km	○	一人ひとり	5名ほど	地域住民1名ほど、芸術大学生1名ほど	120	5
	音楽体操	月-日	毎日	施設内	×	一人ひとり	30名ほど	地域住民1名ほど	30	7
	ストラックピンゴ	不定	週2回	施設内	×	グループ	25名ほど	-	60	6
	動画鑑賞	不定	不定期	施設内	×	一人ひとり	30名ほど	-	60	6
	ドライブ	不定	不定期	施設周辺地域 移動距離: 5.0km以内	○	グループ	5名ほど	-	100	4
	初釜	不定	年3回(1月)	施設内	×	一人ひとり	30名ほど	-	60	6
	鬼退治ゲーム	不定	年1回(2月)	施設内	×	グループ	25名ほど	-	60	6

注1: 個人要望は、各活動への参加は高齢者個人の要望に基づいて行われているかを示す指標である。○は、介護職員に声かけられ、高齢者が自ら該当する活動に参加希望の意思を示す。×は、基本的には活動場所にいる全員に向けて該当する活動を開催するが、高齢者は活動の参加に拒否することも可能である。

注2: 参加形式のなか、「グループ」は、参加者をグループ分けして、活動に参加する。「一人ひとり」は、参加者が一人ひとりで同様な活動を行う。「オリジナル」は、参加者それぞれでオリジナルな活動内容を完成する。

注3: 活動運営協力者は、高齢者に参加する就労的活動/レクリエーション活動をスムーズに行うために、介護職員と共に活動を運営する/サポートする方々である。

なお、本研究は実施に先立ち、京都大学大学院工学研究科の倫理委員会の承認を得ている(承認番号 202313)。また、調査対象者またはご家族、施設責任者に口頭および書面で同意を得た後に実施している。

### 3. 取組概要と開催実態

#### 3-1. 調査施設の取組特徴

調査対象とした S 施設(京都市)は、1999 年 10 月に「社会や地域とつながる運営」理念を掲げ、高齢になんでも、要介護状態や認知症であっても、高齢者のそれぞれが持てる力を発揮して、誰かの役に立ちたい思いを実現する運営を目指して、2018 年 8 月に施設利用者の有償ボランティア活動を開始した。

本調査を実施した 2024 年 1-2 月時点では、S 施設は「裂織り」、「刺し子」、「食堂の下ごしらえ」、「洗車」の 4 つの就労的活動を行っており(Table3)、就労的活動への参加を希望する高齢者が従事している。「裂織り」では、古着屋からリサイクルできない古着を譲り受け、横糸として布をひも状に裂く作業を高齢者が行う。「刺し子」では市内の芸術大学と協働して、オリジナルブランドを創設し、高齢者が心を込めて「刺し子」に関連する商品の製作を行う。「食堂の下ごしらえ」は、子ども食堂の準備である。S 施設では、地域貢献、多世代交流の居場所づくりの一環として月 1 回、子ども食堂を開催しているため、その前日に料理の下ごしらえを高齢者に依頼している。また、「洗車」は、S 施設の福祉車両のメンテナンスを行う自動車販売店からの依頼で、中古車展示場に赴き展示車両の洗車、拭き上げ作業を担当する。

なお、S 施設では、障がいや認知症を有する高齢者への負担を考慮して、就労的活動に 60 分の活動時間を設けている。また、取組を開始した当初は、謝礼に商店街で使える金券を配布していたが、コロナ禍を経て、商店街の金券ではなく、高齢者の要望に応じて、介護職員がお弁当やお菓子などを商店街で購入し、就労的活動に参加する高齢者たちが施設で一緒に食べる方式に変更している。

また、就労的活動と比較するため、調査期間中に S 施設で実施された 8 つのレク活動を観察した(Table3)。これらの活動の中で、「書道」と「作品展示会」は「刺し子」の就労的活動に付随して実施さ

れている。具体的には、「書道」は「刺し子」で製作したブローチやよだれカバーなどのパッケージに載せる商品名に、高齢者の自筆をそのまま印刷するため、実施している。「作品展示会」は、「刺し子」の製作品を出展する際に、高齢者が現場を訪れ、「刺し子」展示コーナーの状況を確認するほか、他のコーナーに展示される作品を鑑賞するために実施している。それ以外の6つのレク活動は、「音楽体操」、「ストラックビンゴ」、「動画鑑賞」(DVD、音楽ライブなどの視聴)、「ドライブ」などの一般的なレク活動のほか、「初釜」、「鬼退治ゲーム」(ボール投げ)などの季節に関連したレク活動である。

### 3-2. 就労的活動と場の設定

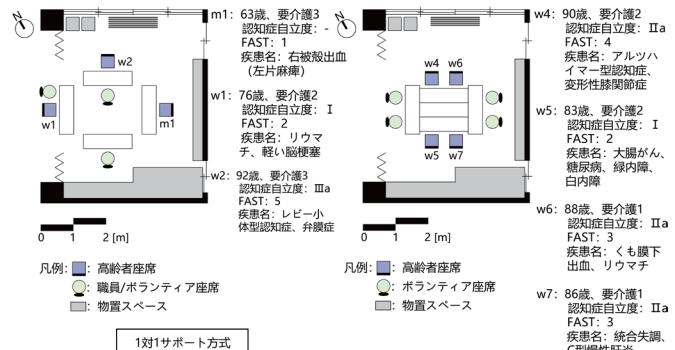
本節では、就労的活動の場の設定及び開催実態を説明する。

「裂織り」では、普段、過ごし慣れたS施設の1階の日常訓練動作室兼食堂から、2階の就労専用に利用している部屋へ移動して実施している。これは空間を移動・変換することで、被介護側から就労実施側にスイッチを切り替える、施設側の意図による。同様に、就労開始前に高齢者は各自で就労専用のエプロンを身に着けたり、出勤簿に判子を押す。一方、介護職員／ボランティアは事前に、高齢者をサポートしやすいように、4つの折り畳み式のテーブルをロの字型に配置、各テーブルの間に人が通れるようなスペースを空けている(Fig. 1)。また、作業用の道具などを事前に取り出し、各高齢者の就労席に置く。「裂織り」に参加する高齢者の中で、m1は左片麻痺を患い、右手でハサミを使いながら布を3センチ程度に切る作業を繰り返す。テープ台を使用して布を押すなど、道具を上手に活用し、サポートなしではほぼ一人で進められる。一方、w1はリウマチを患うため、一人で就労を行うことが困難で、1名のボランティアは隣席で随時サポートを行う。例えば、ボランティアがハサミで布に切り込みを入れ、w1とそれぞれ布の切れ端を持ち、一緒に布を裂くなど、ボランティアはw1に適合する就労内容を見極めて配分し、失敗を未然に防ぐような支援をさりげなく行い、w1の仕事<sup>注10)</sup>の相棒として役割を果たしている。w2は中度の認知症を患うため、就労を進めるにあたって介護職員の指示を必要とする。1名の介護職員／ボランティアはw2の対面に座り、一緒に就労を行ったり、ポジティブフィードバックを行ったりする。このように、ほぼ独りで就労を行える高齢者がいる場合に限り、ボランティアは自分の就労に専念する時間が観察されたが、それ以外の時間は、「1対1サポート」方式で活動が運営されている。

「刺し子」は高齢者が個人のオリジナル作品の作成を目的とした活動であり、針仕事の得意な方が参加している。就労の開催場所には「裂織り」と同様に、折り畳み式テーブルを合せて大きな長方形の就労台を配置している。高齢者2名ずつ長辺に座り、大学生を含むボランティアが短辺に座るように、相互作用が生まれる配席が選択されている(Fig. 2)。高齢者は生地に刺し子を施したり、刺し子した生地をブローチ、よだれカバー、椅子カバーなどに加工するなど、それぞれがオリジナル作品を製作している。また、ボランティアが主体で運営に関わり、活動中にボランティアは高齢者とおしゃべりをしながら、生地切りや、絡んだ糸を解くことなどの準備作業を行い、高齢者と共に刺し子を進めるが、糸通などのお願いをされる際に、高齢者の「必要に応じたサポート」を行う。「刺し子」には芸術大学の大学生がボランティアの一員として活動運営に参加

しており、これが他の就労的活動との違いである。ファッショニに興味のある大学生が多く、彼らの専攻分野は油画、プロダクトデザイン、環境デザイン、染織など多岐にわたる。大学生と高齢者は、お互いの作品を褒めたり、縫い方の工夫を話しながら作業を行う。さらに、大学生は介護施設内の活動に留まらず、高齢者の作品の商品化に向けた商品パッケージのデザインや、イベント出店の応募などの活動にも関わっている。これらの活動に関する話題が「刺し子」就労中にも頻繁に挙がり、高齢者の意見やアイディアを聞くなど話が弾む場面が多く観察された。

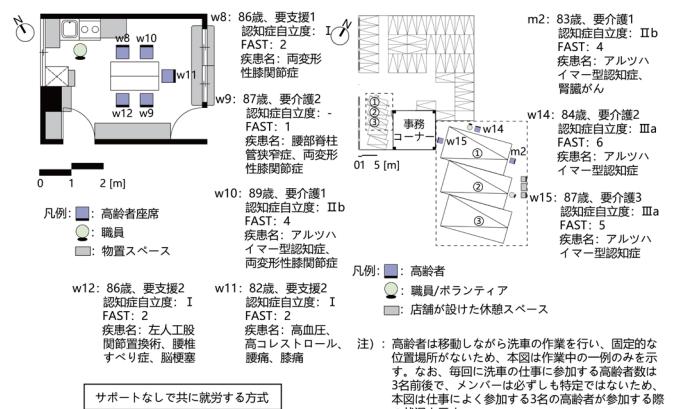
「食堂の下ごしらえ」はS施設の2階にある、流し台や冷蔵庫などの設備を備えた部屋で実施されている。介護職員は軽音楽やラジオを流し、リラックスできる就労環境を整えている(Fig. 3)。高齢者はじやがいも、にんじんなどの皮むきとカット作業を担当する。「食堂の下ごしらえ」に参加する高齢者は、他の就労的活動に比べて、身体状況が良い要支援の方が多く、調理を体が覚えており、サポートなしでも就労を進められる。そのため、介護職員も就労参加者の一員として就労に専念し、「サポートなしで共に就労する」方式で関わっている。具体的に、介護職員は主に高齢者がカットした野菜の洗浄を担当し、高齢者と共に食堂の準備を進める。活動中、高齢者は介護職員に対して「今回はにんじんが多くて、たまねぎの量が少し少ない」といった野菜の量に関する意見を述べたり、見学者に



注)：毎回に刺し子の仕事に参加する高齢者数は4名前後で、メンバーは必ずしも特定ではないため、本図は仕事によく参加する4名の高齢者が参加する際の状況を示す。

必要に応じたサポート方式

Fig.1 裂織り



注)：高齢者は移動しながら洗車の作業を行い、固定的な位置場所がないため、本図は作業中の一例のみを示す。なお、毎回に洗車の仕事に参加する高齢者数は3名前後で、メンバーは必ずしも特定ではないため、本図は仕事によく参加する3名の高齢者が参加する際の状況を示す。

必要に応じたサポート方式

Fig.3 食堂の下ごしらえ

Fig.4 洗車

—18—

子ども食堂の開始経緯を紹介するなど、主体的な行動が観察された。また、介護職員からの情報によると、施設側として「食堂の下ごしらえ」は他の3つの就労的活動と同様に有償の活動であるが、地域の子どもを含む多世代の居場所づくりを目的とするため、謝礼の受け取りを遠慮する高齢者もいる。

「洗車」はS施設のなか、唯一施設外で開催される就労的活動であり、S施設より車で15分ほど(4.1km)に離れた自動車販売店で、1回の活動でおおむね3~5台の車を洗車する。この就労には中重度の認知症の高齢者が多く参加しており、自動車販売店に移動中の車窓から見える街中の景色をきっかけに、思い出など様々な会話が自然に生まれてくることが特徴である。到着後、ボランティアは洗車用のホースやバケツを準備し、車に水をかける作業を行う。介護職員は高齢者を車の前に誘導し、手袋と雑巾を配布して就労を開始する。通常、3名の高齢者が1グループとして参加する場合をFig.4に図示した。m2の男性は、車の正面に移動し、車のフロントガラスからフロントバンパーまで隅々まで丁寧に拭き、正面の作業が終了して、他のメンバーの作業状況を確認しながら積極的に作業を進める。w14は、FAST<sup>注7)</sup>が6でやや重度の認知症を有するため、介護職員が近くに控え、次の作業箇所や雑巾交換などの指示に従い就労を行う。また、w15は車イス利用者であり、移動が困難なため、車の後ろ側の作業を終えた後はその場に待機し、他の高齢者の作業が完了するまで待つことが多い。介護職員は主に高齢者の見守りと心身状態の確認を担当し、適時に休憩を促す役割も果たしており、「必要に応じたサポート」方式を採用している。

### 3-3. 就労的活動の内容と参加者属性

Table4に就労的活動に参加する高齢者の基本属性を示す。性別は女性が全体の約9割と多く、男性は約1割に留まる(Fig.5)。「刺し子」と「食堂の下ごしらえ」の参加者は全員女性である。全体的にみると、80歳以上の高齢者が74%を占め、特に「食堂の下ごしらえ」と「刺し子」では、85歳以上の高齢者が8割と6割を占める(Fig.6)。次に、要介護状況については、要介護3の高齢者が

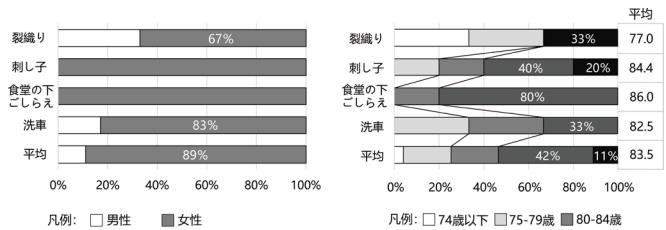


Fig.5 性別

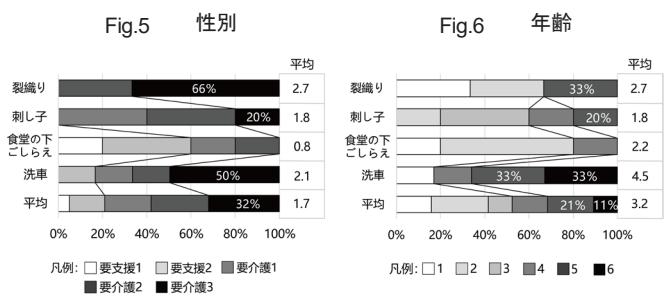
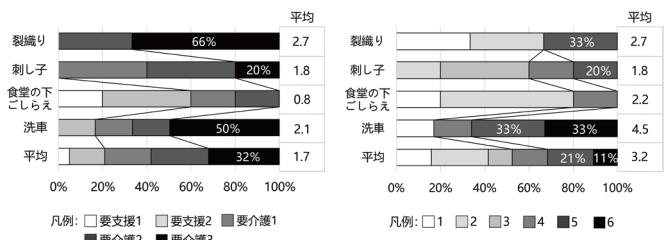


Fig.6 年齢



注) : 厚生労働省介護付費実態調査(平成29年5月審査分~平成30年4月審査分)により、平均要介護度の算出にあたり、「要支援1」と「要支援2」は[0.375]として計算している。

Fig.7 要介護度

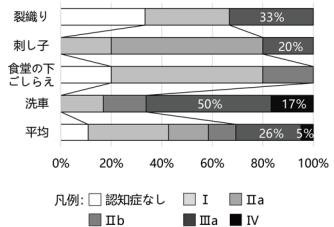
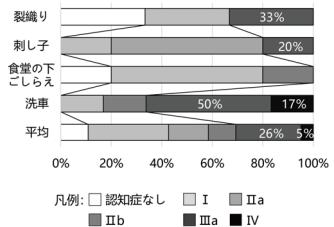


Fig.8 FAST<sup>注7)</sup>

Fig.9 認知症自立度<sup>注8)</sup>



32%で最も多く、特に「製織り」と「洗車」では、66%と50%を占める。これは、「製織り」と「洗車」は単純な繰り返し動作が多いことが一因として考えられる。次いで、要介護2が26%を占め、二番目に多い(Fig.7)。一方、「食堂の下ごしらえ」は要支援の高齢者が6割を占め、他の活動よりも自立度の高い高齢者が参加している。また、FAST<sup>注7)</sup>と認知症高齢者の日常生活自立度(以下、認知症自立度)<sup>注8)</sup>をFig.8-Fig.9に示す。日常生活動作(ADL)の障害程度を評価するFASTを6段階で評価すると、就労的活動全体では、認知症の境界状態として見なされる

Table4 就労的活動に参加する高齢者の基本属性

氏名	性別	年齢	要介護度	FAST <sup>注7)</sup>	認知症高齢者の日常生活自立度 <sup>注8)</sup>	疾患名	参加した就労的活動	参加したレクリエーション活動
w1	女	76	要介護2	2	I	リウマチ、軽い脳梗塞	製織り	ストラックビンゴ、動画鑑賞
w2	女	92	要介護3	5	IIIa	レビー小体型認知症、弁膜症	製織り	動画鑑賞、ドライブ、鬼退治ゲーム
m1	男	63	要介護3	1	-	右被殻出血(左片麻痺)	製織り	音楽体操、動画鑑賞
w3	女	75	要介護3	5	IIIa	アルツハイマー型認知症、糖尿病、脂質異常	刺し子、洗車	書道、作品展示会、初釜、鬼退治ゲーム
w4	女	90	要介護2	4	IIa	アルツハイマー型認知症、変形性膝関節症	刺し子	書道、作品展示会、音楽体操
w5	女	83	要介護2	2	I	大腸がん、糖尿病、線内障、白内障	刺し子	作品展示会、ドライブ
w6	女	88	要介護1	3	IIa	くも膜下出血、リウマチ	刺し子	書道、作品展示会、音楽体操
w7	女	86	要介護1	3	IIa	統合失調症、C型慢性肝炎	刺し子	書道、作品展示会、音楽体操、初釜
w8	女	86	要支援1	2	I	両変形性膝関節症	食堂の下ごしらえ	ストラックビンゴ、初釜
w9	女	87	要介護2	1	-	腰部脊柱管狭窄症、両変形性膝関節症	食堂の下ごしらえ	ドライブ、初釜
w10	女	89	要介護1	4	IIb	アルツハイマー型認知症、両側変形性膝関節症	食堂の下ごしらえ	動画鑑賞
w11	女	82	要支援2	2	I	高血圧、高コレステロール、腰痛、膝痛	食堂の下ごしらえ	ストラックビンゴ、初釜
w12	女	86	要支援2	2	I	左人工股関節置換術、腰椎すべり症、脳梗塞	食堂の下ごしらえ	ドライブ、初釜
m2	男	83	要介護1	4	IIb	アルツハイマー型認知症、腎臓がん	洗車	動画鑑賞、鬼退治ゲーム
w13	女	78	要支援2	1	I	大動脈瘤、圧迫骨折など整形疾患	洗車	動画鑑賞
w14	女	84	要介護2	6	IIIa	アルツハイマー型認知症	洗車	音楽体操、ストラックビンゴ、鬼退治ゲーム
w15	女	87	要介護3	5	IIIa	アルツハイマー型認知症	洗車	鬼退治ゲーム
w16	女	88	要介護3	6	IV	アルツハイマー型認知症、糖尿病	洗車	ストラックビンゴ、鬼退治ゲーム

FAST3までの高齢者は53%を占め、軽度認知症と見なされるFAST4が16%、さらに中度認知症と見なされるFAST5(21%)、やや重度認知症と見なされるFAST6(11%)の中重度認知症が合計で32%であった。しかし、「洗車」に参加する高齢者の66%は中重度認知症であり、重度の認知症高齢者の参加がみられた。また、認知症自立度(Fig.9)もFASTと同様の傾向であった。

全体的にみると、「刺し子」と「食堂の下ごしらえ」では、平均年齢が高く(それぞれ84.4歳と86.0歳)、平均要介護度と平均FASTが低く、高齢であるが身体・認知機能が比較的に良い高齢者が参加する実態を把握した。一方、「裂織り」では、平均年齢が77.0歳で低いものの、平均要介護度が2.7と高いことが特徴として挙げられる。また、「洗車」では、平均FASTが4.5と高く、認知症であっても参加しやすい活動といえる。

#### 4. 業務内容と職員配置

就労的活動およびレク活動に携わる職員の業務内容の分類をTable5に示し、Table5に基づく結果をFig.10、職員配置をFig.11に示している。業務内容の内訳を見ると、「刺し子」に参加する高齢者は独自に作品をデザイン・製作するため、ボランティアのみが配置されるが、ボランティアは半分以上の時間を、生地切りなどの製作材料の準備に費やし、高齢者から糸通しや製品のデザインに関連するアドバイスなどの活動支援の業務は全体の約8%に過ぎない。逆に、ボランティアが高齢者に製品の配色などに関するアドバイスを仰ぐ場面も観察された。

また、「洗車」では、自動車販売店への車による移動が必要なため、1名の介護職員が配置され、業務内容の半分以上が移動関連である。次に、就労的活動を実施する際の見守りや、休憩への誘導やトイレ案内などの介護業務も2割を占め、移動と見守りが多い点が特徴である。

「裂織り」は約54%が活動支援であり、次いで活動参加が約37%となっている。これは、現時点に「裂織り」に参加する3名の高齢者が認知症や身体障がいを有しており、ハサミを使用する作業などにサポートが必要なためである。

次に、「食堂の下ごしらえ」では、1名の介護職員が主に高齢者の下処理済みの野菜の洗浄を担当し、約58%の業務時間が活動参加に費やされている。介護職員は他の業務依頼を受けて一時的に就労的活動の場に離れることがあるが、指示やサポートがなくても、主体的に就労に取組める高齢者が参加しているため、就労的活動のなかで少ない人員配置で開催される活動に該当する。

就労的活動の職員配置<sup>注11)</sup>をみると、「刺し子」は手厚い職員配置がなされ、平均0.8名の高齢者に対して1名のボランティアを配置し、高齢者よりもボランティアのほうが多い状況が見受けられる。次に、「洗車」と「裂織り」では、約2-3名の高齢者に対して1名の介護職員が配置されるほか、ボランティアも活動運営に関わる。特に「裂織り」では、ボランティアが介護職員と同様に1対1で高齢者の活動支援に努めており、手厚い職員配置がみられる。一方、「食堂の下ごしらえ」では、平均4.5名の高齢者に対して1名の介護職員が配置されており、通所介護施設の職員配置基準<sup>注12)</sup>に近い配置である。

就労的活動とは対照的に、レク活動は大人数向けの開催が多く

Table5 業務内容分類

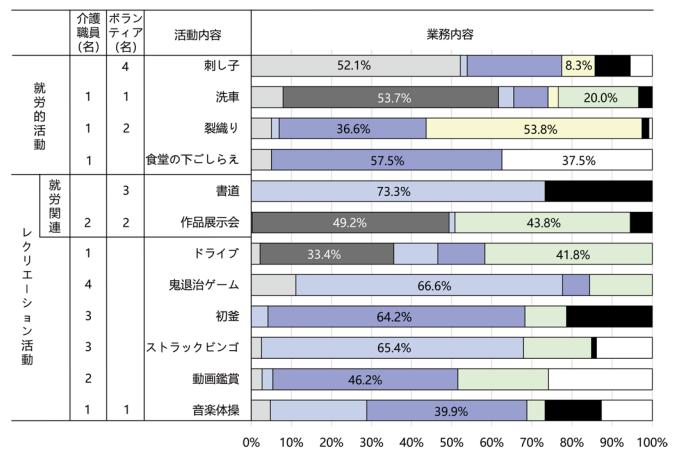
業務分類	詳細
活動準備	席配置・撤収・道具用意・道具出し・絡んだ糸を解く・糸を巻く・生地切り・洗車の水かけ・動画を流す・調整・オフする、介護用具整理・持出し
活動運営	呼びかけ、道具配り・回収、活動説明、活動手配、点数記録、結果発表、各種体操の実施、施設内通貨の配り、活動運営について高齢者と意見交換する
活動参加	刺し子を作成する、洗車をする、動画を見る、茶道を見る、ゲームをする
活動支援	布/糸切り、糸通し、高齢者にアドバイスをする
介護業務	見守り、休憩誘導、席説明、高齢者の座席調整、歩行介助、車イス介助、車移乗
移動関連	車運転、バイク移動、乗車、駐車
その他	事務作業、写真記録など
他の業務	該当する活動に関わっていない

注1)：活動準備は、介護職員またはボランティアが活動をスムーズに開催できるように必要な業務を行うことを指す。

注2)：移動関連は、洗車やドライブなど施設外に出かける必要がある活動に含まれる業務内容である。

注3)：活動参加は、介護職員またはボランティアが高齢者と同様な活動内容を行なうことを指す。

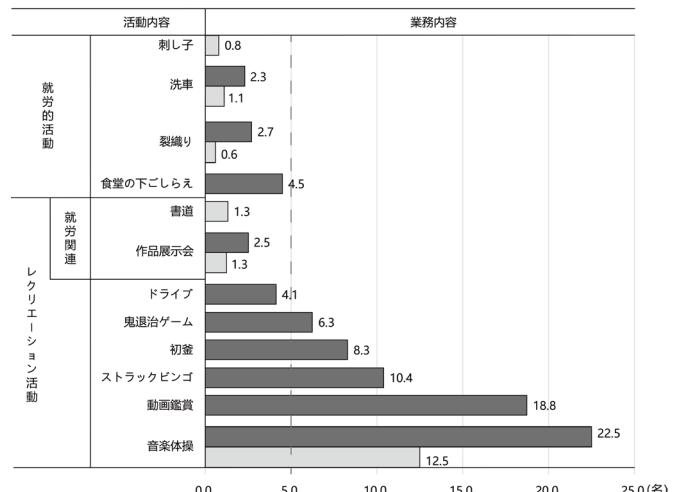
注4)：該当する活動に関わっていないは、介護職員またはボランティアが活動開催場所にいなく、他の業務に担当することを指す。



凡例: ■活動準備 □移動関連 ▨活動運営 □活動参加 ▨活動支援 □介護業務 ▨その他 □関わっていない

注: 本表は活動運営によく見られる職員とボランティアの配置名数を示し、活動参加者の名数など諸事情により、毎回は必ずしも同様とは限らない。

Fig.10 活動運営の業務内容



凡例: ■: 1名の介護職員が見守り・サポートした高齢者の数

□: 1名の介護職員・ボランティアが見守り・サポートした高齢者の数

注: 厚生労働省の「通所介護における介護職員の人員基準」では、利用者数が15名を超える場合、必要な介護職員数は「(利用者数-15)÷5」+1で算出される。よって、本研究では、調査対象施設の定員から、1名の介護職員が5名の高齢者を見守り・サポートすることを基準として分析する。

Fig.11 活動ごとの職員配置

(Table3)、職員配置の少ない場合がみられる(Fig.11)。しかし、「書道」と「作品展示会」は「刺し子」に付随するレク活動で、大学生ボランティアが関わり、手厚い配置がなされている。「作品展示会」は、京都市内のイベント会場で開催されるため、約49%の業務内

容が移動関連である。また、イベント会場で作品を鑑賞する際に、介護職員／ボランティアは約44%の業務時間を歩行介助や車イス介助などの介護業務に費やしている。また、「ドライブ」では、平均4.1名の高齢者に1名の介護職員が配置され、就労的活動の「食堂の下ごしらえ」よりも手厚い職員配置がなされている。運転や見守り、歩行介助などが業務のメインであるが、1台の車に4-5名の高齢者が乗車するため、最低1名の介護職員（運転手）が必要であることがその一因である。「音楽体操」、「動画鑑賞」、「ストラックビンゴ」は職員配置が比較的少ないレク活動であり、主に活動に関わる介護職員がいる一方、業務内容は状況に応じて柔軟に調整され、一部の時間に他の業務に関わる介護職員もいる。例えば、「動画鑑賞」と「音楽体操」では、介護職員は高齢者と共に動画を見たり、音楽体操を行う活動参加が業務内容の4割前後を占めるが、その一方で、事務作業や他の業務なども25%を超えており、「ストラックビンゴ」と「鬼退治ゲーム」（ボール投げ）はスポーツ系の活動であり、介護職員の業務内容は65%以上が活動運営に費やされている。「鬼退治ゲーム」は節分に開催された季節行事であり、介護職員は鬼の衣装を着るなど、場を盛り上げる役割も担っている。また、「初釜」は、年明けの季節行事のレク活動で、茶道の先生を招いてお茶が丁寧に振舞われる。介護職員も和服に着替え、大半の時間は高齢者と共に活動に参加し、随時活動の様子を写真や動画に記録していた。

## 5. 活動の効果

就労的活動やレク活動では、高齢者がそれらの活動から得られる効果は異なると考えられる。本章では高齢者が各活動へ参加することで得られる効果をA-QOAの観察評価法を用いて「活動の質」として数値化して分析する。

Table6には、A-QOAにおける21の観察項目を「活動遂行」、「活動結果」、「感情表出」、「社会交流」、「言語表出」の5分類<sup>12)</sup>で示している。また、高齢者が各活動に参加する際の反応を観察し、その活動が高齢者にとって意味のあるものかどうか、基準に基づき判断してA-QOAの評点の4点から1点をつける。

### 5-1. 個人別でみた活動効果

個々の高齢者が就労的活動やレク活動に参加する際の特徴的な事例を取り上げ、活動効果に影響を及ぼす要素の分析を行った。ここでは、いずれの活動に参加する際にも、主体的な行動が観察された

Table6 A-QOAにおける5つの観察視点(21項目)および採点基準<sup>注5)</sup>

採点項目 (21項目)	活動遂行 1.開始、2.視線、3.位置、4.継続、5.集中、6.技術、7.選択、8.工夫 活動結果 9.満足感、10.有能感、11.意欲 感情表出 12.笑顔、13.高揚 社会交流 14.交流、15.協調、16.教授、17.意思、18.思いやり、19.共有 言語表出 20.流暢、21.回想
	4点：非常に強く例外的に観察される、3点：観察される、2点：観察されるが程度は限定的/疑問 1点：観察されない
	【4点】 他者に「これが私が作ったものだよ」と言って、自慢そうな表情に見せて回っている。 【3点】 刺し子を完成させて、その出来栄えに納得し、喜びを示す表情を浮かべる。 【2点】 完成した仕事を自分ではあまり良いと思っていない様子であったが、他者から褒められたことで「また来週に色を入れておきます」というような発言が聞かれる。 【1点】 刺し子の活動は行っているが、特に表情をえることがなくて、活動の結果や評価について、関心がなかったり、誇らしさを示す様子がみられない。
採点例 10. 有能感を 例として	

Table7 事例でみた高齢者の活動参加実態と効果

対象者	就労的活動		レクリエーション活動			
	w7: 86歳、要介護1、生活自立度：IIa、FAST: 3、疾患名：統合失調、C型慢性肝炎	刺し子	作品展示会、書道、初釜、音楽体操	観察内容		
活動 種類	【選択】 4点	青系の糸を複数取り出して、色を丁寧に見比べて選択するなど、細かいところまで工夫しており、強いこだわりが作品にみられる。	【開始】 4点	あらかじめ出発の準備を整えるよう、【作品展示会】に参加するのを楽しみに待つ様子がみられる。		
			【継続】 3点	「初釜」の活動に参加していく、茶道の先生の振舞を興味深そうにみていている。		
			【継続】 4点	本来は「初釜」に30分ほど参加した後で、他活動に参加する予定であるが、スタッフに何度も説かれたが、続けて茶道の活動に参加したい意思を示した。		
			【工夫】 3点	自分で選択した筆で字を書くことや、座りながらやることなど、「書道」を行う際に自分のやり方に好みが示される。		
活動 結果	【工夫】 3点	製作品のデザインする際に、大学生などのアドバイスを聞きたりして参考している。	【選択】 3点	座ったままでの脚の運動がうまくできないので、立ち上がりたって「音楽体操」を行う。		
			【工夫】 3点	観察されるが程度は限定的なため、内容記載を省略する		
感情 表出	【有能感】 4点	活動見学者に「これが私が作ったものだよ」と言って、自慢そうな表情で見せて回っている。		観察されるが程度は限定的なため、内容記載を省略する		
	【意欲】 3点	活動が終わった後に、次回の製作計画についてボランティアと一緒に話をする。				
社会 交流	【笑顔】 3点	製作品を完成させ、他の高齢者やボランティアより褒められ、良い笑顔になる。		観察されるが程度は限定的なため、内容記載を省略する		
	【交流】 3点	完成した製作品（ブローチ）のレンジ方法などについて自分の考えを他者に伝える。	【思いやり】 3点	「作品展示会」にディスプレイされたS施設の「刺し子」の取組を紹介するポスターをみて、「自分の顔（似顔絵）と名前を載せてもらつてありがとうございます」とポスターを作製した大学生ボランティアに謝意を示す。		
	【教授】 4点	大学生ボランティアに服のリメイクについて聞かれると、複数の方を熱心に説明するなど、多数の知識を表出している。				
言語 表出	【意欲】 3点	仕事中にボランティアに「糸通しをもらえる？」などのお願いができる。				
	【思いやり】 4点	自分の作品を完成した後、過去仕事に参加した他者が未完成した作品を代わりに完成させる。				
言語 表出	【流暢】 3点	仕事の状況に即して言葉が主体的に出てくるようになり、その流暢さが増やす。		観察されるが程度は限定的なため、内容記載を省略する		
活動 種類	対象者 m2: 83歳、要介護1、生活自立度：IIb、FAST: 4、疾患名：アルツハイマー型認知症、腎臓がん	洗車				
				鬼退治ゲーム、動画鑑賞		
	活動 遂行	【開始】 4点	【開始】 1点	「鬼退治ゲーム」に参加するように声かけられるが、両腕でクロスして拒否した。		
感情 表出	【位置】 4点	腰を屈めたり、背伸びたりして、細かい部分まで掃除できるようと体勢を変えながら仕事を行う。	【集中】 1点	「動画鑑賞」に参加する際に、周囲の様子を気にするなど、集中しているとはいえない状態である。		
	【高揚】 3点	仕事を終後、他の高齢者（グループメンバー）とハイタッチをして職場の仕事について満足した様子がみられる。		観察されるが程度は限定的なため、内容記載を省略する		
社会 交流	【交流】 3点	自動車販売店まで移動する途中には、街の景色（レストランの名前や、運転手の性別構成、マンション生活の良し悪しなど）をしながら、近くにいる人に世間話をするとなど、主体的な交流が多くみられる。		観察されるが程度は限定的なため、内容記載を省略する		
言語 表出	【流暢】 3点	就労や車移動途中などで、会話の量が増加する。		観察されるが程度は限定的なため、内容記載を省略する		
活動 種類	対象者 w15: 87歳、要介護3、生活自立度：IIIa、FAST: 5、疾患名：アルツハイマー型認知症、車イス利用	洗車				
				鬼退治ゲーム		
	活動 遂行	【継続】 2点	車イスを座りながら、目の前の一部を洗車した後、そのまま活動を終了する。	【継続】 2点	最初に配ってもらったボールを全て投げたら、そのままゲームを終了する。	
感情 表出	【工夫】 3点	腰を屈めてボールを拾うことができないため、介護職員がボールを配る際に「ボールがもっと欲しい」とお願いした。	【工夫】 3点	介護職員が所属チームが箱に入れたボールの数を数える際には、職員と一緒に数えたり、手拍子をしたりして、感情が高まる様子がみられる。		

w7、レク活動への参加に拒否する態度を示すが、就労的活動で活躍されるm2、そして足が不自由で活動内容が制限されるw15の3名を事例として取り上げる(Table7)。なお、Table7には3名の特徴的な言動のみ示している。

w7は、「作品展示会」や「初釜」などのレク活動に参加する際に、自ら主体的に活動の準備や参加を行い、「書道」や「音楽体操」では、より良い活動の遂行のために、参加方法を選択する姿が観察された。一方、レク活動と比較すると、「刺し子」に参加する際には、過去に経験した知識や技術を生かしてオリジナル商品を製作することで、誇らしさやプライドなどの有能感(活動結果)を示し、他者に対して知識や技術を教える姿勢(社会交流)が観察され、「刺し子」への参加が他者への貢献や自尊心を高める意義として表れていた。

m2は、普段施設内に居る際には、全員に向けて開催されるレク活動に参加する意欲が低く、他者とのコミュニケーションも少ない一方で、「洗車」には積極的に関わっている。自動車販売店まで移動する際、m2は車窓から街中の様子を観察し、「このレストランの名前は何と読むの?」、「ドライバーは女性のほうが多いようだ」、「マンションでの生活は大変だ。買物が不便でしょう」などの発見や考え方を他の高齢者や介護職員に共有し、流暢に発話する姿がみられた(社会交流と言語表出)。また、他者と一緒に就労に取組むことで、集団内の仲間意識が高まり、活動終了後には自ら他のメンバーに喜びを分かち合う感情表出が観察され、就労的活動から良い影響を受けている様子が示された。

w15は車イス利用者であり、「鬼退治ゲーム」に参加する際に、身体的不便による問題を予測し、その改善策を講じるなどの工夫がみられた(活動遂行)。また、所属チームのボール数を数える際には、w15は手拍子をしながら介護職員と一緒に数えるなど、快感情が高まる様子が観察された。「洗車」に参加する際には、車イス利用のため、狭い通路を通過することが困難であるため、車の後ろ側の一面しか掃除できず、座ったままで手の届く範囲も限られるため、仕事量は多くない。他のグループメンバーが就労を行う際に、w15は車イスに座りながら待つ時間が多く、就労への参加を通じた社会交流、言語表出の機会が少なかった。

このように、高齢者一人ひとりの性格、関心、身体機能はそれぞれ異なるため、就労的活動とレク活動のいずれもその個人に合った活動の選択が重要といえる。

## 5-2. 就労的活動の活動効果

調査した18名高齢者については、それぞれ就労的活動、レク活動の数が同数になるように、行動観察調査を実施し、44の就労的活動、44のレク活動の場面について、A-QOAに基づく行動観察調査

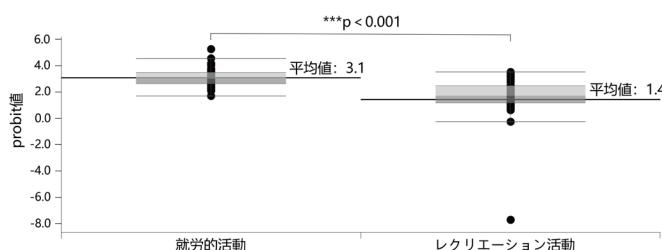


Fig.12 就労的活動の効果比較

を実施した。活動効果の分析には、AqaProを用いて各観察データから得られたA-QOAの21項目の得点(順序変数)をProbit値(連続変数)<sup>注6)</sup>に変換し、観察者の寛容度の影響を補正したProbit値を用いて、定量的に分析した。

Fig.12では活動種別とProbit値への対応の関係を多重比較した結果を箱ひげ図に示した。データは正規分布に従わないと想定し、ノンパラメトリック法のMann-Whitney U test<sup>注13)</sup>を使用して、就労的活動とレク活動の有意差を確認した。その結果、就労的活動の平均Probit値は3.1であるに対し、レク活動の平均Probit値は1.4となり、全体的に就労的活動はレク活動よりもProbit値(活動効果)が有意に高い傾向がみられた。

## 5-3. 活動別の効果の比較

活動内容別の活動効果をProbit値の高い順にTable8に示す。就労的活動のなかで、「刺し子」の平均Probit値は3.4で最も高く、次いで「食堂の下ごしらえ」、「洗車」が平均Probit値3.0、「製織り」が2.7と続き、総じてレク活動より、就労的活動のProbit値が高い結果となった。一方、レク活動のなかで、「動画鑑賞」の活動効果(平均Probit値は-2.1)は全体的に低かった。活動に参加するように声をかけられているが、終始うつむいていて、活動を行う様子がまったくない高齢者もみられた。「動画鑑賞」が全員に向けて開催される活動であり、動画(DVDや音楽ライブなど)の内容は必ずしも全ての高齢者の興味を引くものではないこと、部屋を暗くするため、眠気を感じやすいことなどが要因として考えられる。

活動種別の効果を詳しく把握するため、A-QOAの5つの観察視点に分けて分析・考察する。なお、各活動のサンプル数が限られるため、統計的な有意検定が実施されておらず、関連する要因の把握のため、

Table8 活動内容別の活動効果

刺し子 (17) Probit値: 3.4	作品展示会 (5) Probit値: 3.2	就労的活動平均 (44) Probit値: 3.1
活動遂行 3.0 言語表出 2.5 社会交流 2.6 感情表出 2.2	活動遂行 2.6 言語表出 2.7 社会交流 2.6 感情表出 2.5	活動遂行 2.8 言語表出 2.2 社会交流 2.3 感情表出 2.1
食堂の下ごしらえ (9) Probit値: 3.0	洗車 (10) Probit値: 3.0	製織り (8) Probit値: 2.7
活動遂行 2.9 言語表出 2.1 社会交流 2.6 感情表出 1.8	活動遂行 2.7 言語表出 2.4 社会交流 2.5 感情表出 2.3	活動遂行 2.9 言語表出 1.9 社会交流 2.3 感情表出 2.4
書道 (4) Probit値: 2.5	ドライブ (4) Probit値: 2.3	初釜 (6) Probit値: 2.0
活動遂行 2.7 言語表出 1.5 社会交流 2.0 感情表出 1.9	活動遂行 2.4 言語表出 2.1 社会交流 2.3 感情表出 1.3	活動遂行 2.0 言語表出 2.2 社会交流 1.5 感情表出 2.0
鬼退治ゲーム (6) Probit値: 1.8	ストラップビング (6) Probit値: 1.6	レクリエーション活動平均 (44) Probit値: 1.4
活動遂行 2.2 言語表出 1.2 社会交流 1.7 感情表出 2.0	活動遂行 2.1 言語表出 1.3 社会交流 1.8 感情表出 <br;="" 1.4=""></br;="">	活動遂行 2.2 言語表出 1.6 社会交流 1.7 感情表出 1.5
音楽体操 (7) Probit値: 1.2	動画鑑賞 (6) Probit値: -2.1	凡例: ■: 就労的活動 ■: 就労関連のレクリエーション活動 ■: レクリエーション活動
活動遂行 2.2 言語表出 1.1 社会交流 1.1 感情表出 1.2	活動遂行 1.5 言語表出 1.0 社会交流 1.1 感情表出 1.2	注: ( ) 内に該当する観察事例数を記載。

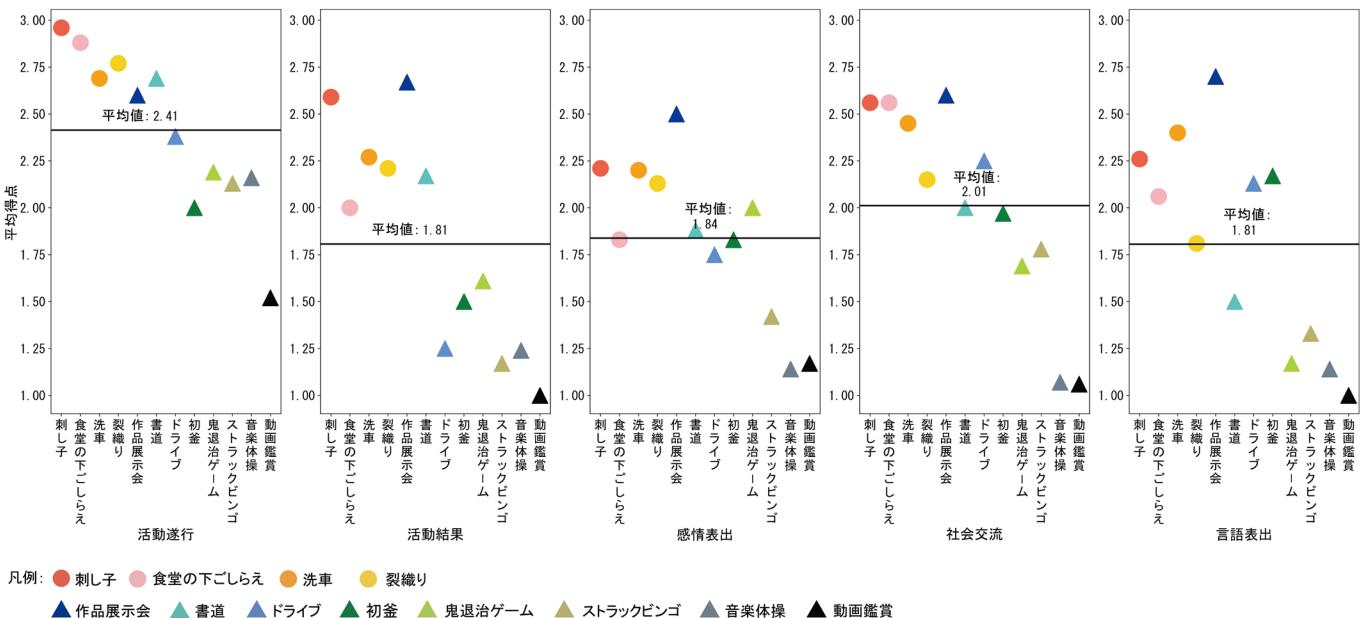


Fig.13 5つの観察視点ごとの A-QOA の平均得点

図表から読み取れる内容の考察を行う。A-QOA の 21 の観察視点を 5 分類に区分して分析すると、4 つの就労的活動はレク活動を含む 12 種類の活動のなかで、平均値以上の得点を有しており (Fig. 13)、レク活動よりも活動効果が全般的に高いことがわかる。

活動別に効果 (Table8) をみると、「刺し子」では、「活動遂行」が 3.0、「活動結果」が 2.6、「社会交流」が 2.6 と、全体的に高い得点を示している。この理由として、「刺し子」は仕事の自由度が高く、高齢者が自分の意思に従いプローチやよだれカバー、椅子カバーなど、多種類の就労を選択できるほか、デザイナーとして製作品の模様設計や配色なども各自で決められることが考えられる（「活動遂行」）。また、大学生がデザインした製品パッケージには、各高齢者の名前や似顔絵、作品名などが掲載されており、高齢者はパッケージされた作品をみることで自己肯定感が高まるなど、高齢者自身が「活動結果」を認識しやすい工夫が取り入れられていること、さらに、「刺し子」に関連する話題だけではなく、旅行などの多様な話題を大学生が作業中に取り上げ、多世代交流（「社会交流」）の場にもなっていることがその要因として考えられる。

次に、「食堂の下ごしらえ」は、「活動遂行」と「社会交流」が、それぞれ 2.9、2.6 と得点が高い。この理由は、「食堂の下ごしらえ」に参加する高齢者は調理に慣れた女性で、遂行力が高いこと、またグループで作業するため、高齢者はお互いに協調し、周囲の方への思いやりや感謝の気持ちを持つことが要因として考えられる。一方、「活動結果」と「感情表出」の得点が相対的に低い理由は、下ごしらえが子ども食堂の開催日の前日に行われるため、地域の子どもたちが料理を食べる際の喜びや感謝が高齢者に直接伝わりにくく点が考えられる。

「洗車」では、「言語表出」が 2.4 とは他の活動と比較して高い。「洗車」は、唯一街中に出かける就労的活動であり、グループでの就労に加えて、往来の途中で街中の景色を見ながら、思い出話や出来事を回想し、他者との交流が生まれやすいためと考えられる。

次に、「裂織り」は他の就労的活動と比較すると、「社会交流」と「言

語表出」の点数が相対的に低い。この理由として、介護職員が高齢者に対するサポートを提供しやすいように、高齢者の席を分散配置するため、コミュニケーションが生まれにくいと考えられる。

レク活動のなかで、平均 Probit 値が 3.2 と高い「作品展示会」では、「活動結果」(2.7)、「感情表出」(2.5)、「言語表出」(2.7) など、他活動と比較して特に高得点であった。「作品展示会」は「刺し子」に関連するレク活動として開催されており、高齢者が外部のイベントで自分自身がデザイン・製作した商品の展示状況を確認することで、生きがいとやりがいを感じやすいためだと考えられる。例えば、w6 は「ここ (S 施設の刺し子の作品展示コーナー) で自分の携帯で写真を撮ってもらいたい！」と述べており、活動の結果に対して有能感と満足感を得ている様子が観察された。また、高齢者は他の展示コーナーの作品を鑑賞することで、会話の量と流暢さが増加する様子が確認され、それも活動効果に結び付いた一因と考えられる。

また、「ドライブ」活動では、「社会交流」(2.3) と「言語表出」(2.1) で、平均値より高い得点が得られている (Fig. 13)。この活動では、仲の良い高齢者を小グループに分け、市内の神社などに連れて行き、梅や桜を鑑賞したり、思い出の場所まで連れて行って散歩するなどの活動が行われる。高齢者は活動中、昔の思い出を回想し、発語が持続的に引き出される様子が多く観察された。

#### 5-4. 要介護度及び FAST 別の活動効果

要介護度及び FAST 別の平均 Probit 値を Table9-10 に示す。要介護度を、「要支援 1-2」、「要介護 1-2」、「要介護 3」の 3 区分に分けた結果、「要介護 1-2」が、就労的活動 (3.4)、レク活動 (1.6) となり、他の 2 区分よりも高い平均 Probit 値を示した。一方、「要介護 3」の平均 Probit 値をみると、就労的活動 (2.7)、レク活動 (1.1) となり、3 区分のなかで低い値であるが、レク活動に対する就労的活動の平均 Probit 値は 145.5% 増加し、「要介護 3」の高齢者が就労的活動への参加により、最も大きな効果を得ることを確認した。

Table9 要介護度別の活動効果

要介護区分	Probit 値（活動効果）		
	要支援 1-2 (7)	要介護 1-2 (25)	要介護 3 (12)
就労的活動	2.8	3.4	2.7
レクリエーション活動	1.4	1.6	1.1
増加率	100.0%	112.5%	145.5%

注1: ( ) 内に該当する観察事例数を記載。  
注2: 増加率は、レクリエーション活動に対する就労的活動の割合を示す。

これは、普段介護されがちな「要介護3」の高齢者が、本人の意思や能力に合わせた就労的活動の参加を通して、自分自身が役立ち、満足感や有能感が得られたことが原因と考えられる。

次に、FAST を認知症境界状態以下の「FAST1-3」、軽度認知症と見なされる「FAST4」、中重度認知症と見なされる「FAST5-6」の3区分に分けて分析した。その結果、認知症の進行状況を問わず、3区分とも就労的活動の平均 Probit 値が 3.0 以上<sup>注6)</sup> あり、活動の状態が良いと判断できる結果が得られた。「FAST5-6」の中重度認知症の平均 Probit 値については、就労的活動 (3.0)、レク活動 (1.3) となり、3区分のなかで相対的に低いものの、就労的活動の平均 Probit 値はレク活動よりも 130.8% 高く、認知機能が低下した高齢者のはうが、就労的活動の参加効果が明確に現れることを把握した。認知症が進行すると、今までできたことがうまくいかないことが増えるため、本人は有能感を喪失しやすい状況になるが、就労的活動に参加することで、活動から得られた成果を他者と共有することで、他人に認められる機会につながり、その結果、自己肯定感が高まるためだと考えられる。

## 6. 結論

以上、本研究は通所介護施設における就労的活動の開催実態や、サポート体制、活動効果、レク活動との比較を A-QOA の評定手法を用いて詳細に分析した。得られた成果は以下の通りである。

### 1) 就労的活動の開催実態と場の設定

就労的活動に参加する高齢者のほとんどが 80 歳以上で、要介護状態であり認知症を有していた。4つの就労的活動には、それぞれ異なる特徴があり、「高齢者の趣味や特技を生かせる就労」や、要介護度が高くても参加しやすい「比較的単純な作業を行う就労」、認知症高齢者でも大いに活躍された「施設外で身体を動かす就労」など、多様な就労メニューが設けられていた。また、介護職員に加えて、大学生や地域住民などもボランティアとして就労的活動の運営に関わり、高齢者の能力と個性に応じて、「1対1の個別サポート」、「必要に応じたサポート」、「サポートなしで共に就労する」異なる3つの活動運営・サポート方式が実践されていた。また、高齢者が就労的活動に集中できるように、就労専用の空間を設けるほか、就労用のBGM やエプロン、出勤簿を用意するなど、認知症高齢者の気持ちの切り替えや、活動が円滑に進むような配席の設定、個人の似顔絵の作品パッケージなど、環境構築面の工夫が施されていることを把握した。

### 2) 職員配置と業務内容

就労的活動のなかで、「裂織り」と「刺し子」は職員が手厚く配

Table10 FAST 別の活動効果

FAST区分	Probit 値（活動効果）		
	FAST 1-3 (25)	FAST 4 (6)	FAST 5-6 (13)
就労的活動	3.2	3.1	3.0
レクリエーション活動	1.5	1.5	1.3
増加率	113.3%	107.0%	130.8%

注1: ( ) 内に該当する観察事例数を記載。

注2: 増加率は、レクリエーション活動に対する就労的活動の増分の割合を示す。

置される活動であるが、「裂織り」は要介護度が高い高齢者が多く参加するため、「1対1の個別サポート」方式を主に採用し、きめ細やかな支援を行っている。一方、「刺し子」は介護職員ではなく、ボランティアが主体として活動運営に関わっている。高齢者は独自に作品を製作できるため、ボランティアは高齢者と交流しながら就労に参加するなど、「必要に応じたサポート」方式を採用している。また、「洗車」も「必要に応じたサポート」方式で運営し、介護職員は運転と見守りを担う。一方、「食堂の下ごしらえ」では、身体状況が良く、調理の得意な方が多く参加し、主体的に就労に取組むことができるため、「サポートなしで共に就労する」方式で開催され、通所介護施設の職員配置基準と同等の職員配置が確認された。

また、レク活動については、大人数向けのレク活動の職員配置は少なく、介護職員は活動の運営と参加を主な業務とする一方、小人数向けの就労関連のレク活動や「ドライブ」など Probit 値（活動効果）の高いレク活動の職員配置は、就労的活動と同様な手厚い配置傾向がみられた。

### 3) 活動の効果

就労的活動とレク活動の Probit 値（活動効果）を比較分析した結果、就労的活動のほうがレク活動よりも有意に高い活動効果を示すことが明らかになった。

就労的活動の「刺し子」と「食堂の下ごしらえ」は高齢者の趣味や特技を生かせるため、「活動遂行」や「活動結果」、「社会交流」の A-QOA の平均得点が特に高く、質の高い就労的活動であることが示された。これは、高齢者が好きなこと、得意なことを行うため、楽しく主体的に取組むことができるほか、馴染みのある話題についての交流も促進されるためだと考えられる。さらに、高齢者はパッケージされた作品をみるとことや、作品展示会に参加することにより、就労的活動から得られた成果を実感しやすく、満足感や有能感の向上につながると考察された。また、「洗車」は「施設外で身体を動かす就労」であり、他活動に比較して、「言語表出」では特に高い効果が示された。施設外で行われるグループ形式の就労であり、目標と成果を他のメンバーと共有できる点や、就労地への往来途中で街の風景をみると喜びや懐かしさの感情が喚起され、他人との会話も自然に生まれるなどがその要因といえる。一方、レク活動のなかでも、「作品展示会」や「ドライブ」などの活動は、興味・関心のあるイベントや季節を感じられる行事に参加することで、「社会交流」や「言語表出」などの他人との交流を促す効果を把握した。

以上、就労的活動とレク活動に共通する、高い効果が得られた活動は、高齢者の個人要望に基づき、高齢者が主体的に活動の内容や方法を選択できる特徴があり、活動の質を高めるポイントとして挙げられる。

また、就労的活動は、心身状態が自立に近い高齢者に限らず、要介護度が高い高齢者や、中重度認知症の方なども多数参加していた。また、身体・認知機能の低い高齢者のはうが、就労的活動の参加により、本人に明確な活動効果をもたらす実態を把握した。日常生活では介護される一方の高齢者には、就労的活動から得られた成果を他者と共有することで、自分自身が役立ちを感じる経験を通して、自己肯定感が高まるきっかけになることがその要因と考えられる。

### 4) 今後の課題

活動参加は人に様々な影響と効果をもたらすが、認知症などを有

する高齢者は自分の状態をうまく説明できないため、第三者が客観的に効果を評価することが就労的活動の課題であった。本研究では、A-QOA の評定指標を取り入れることで、就労的活動およびレク活動と対象者の結びつきの強さ（活動の質）を数値データで比較・分析し、就労的活動の有効性を実証できた。しかし、本研究は 1 施設における事例調査であり、S 施設での調査は主に施設内に限られている。施設外で行われる不特定多数に接する就労的活動も、現在増加していること<sup>1)</sup>が報告されている。そうした活動の運営形式やサポート体制、活動効果の研究については本研究では扱えていない。その点については今後の課題として検討する予定である。

## 謝辞

末筆ながら調査にご協力頂いた S 施設の高齢者、職員に厚く御礼を申し上げる。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B 課題番号 21H01503、代表、三浦研）の助成、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の助成を受けたものである。

## 注

- 注 1) 就労的活動とは、使用者と従事者の間に従属関係が弱く、労働法の範囲外に位置付けられる活動であり、要介護高齢者においては、ケアプランに基づき介護職員の見守り・介助等の支援を受けながら活動を行うことで、自らの役割を持ち、達成感や満足感、自身回復などの効果が期待される活動と本研究では定義する。
- 注 2) 厚生労働省老健局「事務連絡「若年性認知症の方を中心とした介護サービス事業所における地域での社会参加活動の実施について」、平成 30 年 7 月 27 日」では、①利用者ごとの個別サービス計画における社会参加活動等を位置づけること、②社会参加活動等の内容が利用者ごとの個別サービス計画に沿うこと、③事業所の職員による見守り、介助等の支援が行われること、④利用者が日常生活を送る上で自らの役割を持ち、達成感や満足感を得て、自信を回復するなどの効果が期待される取組であること、⑤使用従属関係がなく、適正な賃金の扱い方がなされ、労働者派遣に該当しないことの 5 つが用件として提示されている（文献 9）。
- 注 3) 厚生労働省「指定居宅サービス等の事業の人員、設備及び運営に関する基準、第百四条の二：「指定通所介護事業者は、その事業の運営に当たっては、地域住民又はその自発的な活動との連携及び協力をを行う等の地域との交流に努めなければならない」（文献 10）。
- 注 4) 「A-QOA (Assessment of quality of activities)」は、クライエントが何らかの自然文脈の中で活動を行っている際の活動の質 (Quality of activities; QOA) を観察から評価するための評価ツールであり、特徴として、以下の 4 点が挙げられる。① A-QOA はクライエント中心の評価であり、本人目線での活動や作業の効果や意義を評価すること、②活動の始まりから終わりまでが観察できれば、観察時間に依存することなく、評価が可能であること、③観察項目は 21 項目からなり、その観察项目的頻度と強さから各項目を 4 段階で評定すること、④ A-QOA はラッシュモデルを用いて、その評価としての構成概念の妥当性を検証していく、21 項目が 1 つのスケールとして評価できることを証明していること（文献 11）。
- 注 5) A-QOA における 21 の観察項目（文献 12）

1	活動遂行	活動を開始する	開始	Initiation
2		活動の対象に視線を向ける	視線	Gaze
3		活動の対象に体を位置づける	位置	Position
4		活動を継続する	継続	Continuation
5		活動に集中する	集中	Concentration
6		活動に関わる知識や技術を示す	技術	Technique
7		活動中に内容を選択する/好みを示す	選択	Selection
8		活動が円滑に進むように工夫する	工夫	Contrivance
9	活動結果	活動の結果として満足感を得る	満足感	Satisfaction
10		有能感を得る	有能感	Capability
11		次の活動への意欲を示す	意欲	Willingness
12	感情表出	笑顔が見られる	笑顔	Smile
13		高揚する	高揚	Excitement

14	社会交流	活動を通して交流する	交流	Interaction
15		一緒に協調して活動する	協調	Cooperation
16		活動に関係した知識・技術を教える	教授	Instruction
17		他者に意思を伝える	意思	Intention
18		他者を思いやる	思いやり	Consideration
19	言語表出	活動から喚起された感情を他者と共有する	共有	Share
20		発語の流畅さがある	流畅	Utterance
21		回想する	回想	Reminiscence

注 6) AqoaPro は A-QOA のデータを分析するために独自に開発された PC アプリケーションである。AqoaPro を使用することで、順序変数で得られた結果を Probit 値という連続変数に変換し、標準偏差を 1.0 としてデータが正規分布するように補正する。この過程で、理論上、99%以上の評価結果が 0.00 ~ 5.00 の範囲に収まるように Probit 値が算出される。それにより、下の図に示すような Probit 値の解釈が可能になる。また、A-QOA は観察評価法であり、評価者の寛容さが評価に影響を与える可能性があるが、AqoaPro ではその補正を行っている。具体的には、A-QOA の研修時に実施する各評価者の評価結果を基に、各評価者の寛容度を多面的ラッシュモデル (Multi-faceted Rasch Model) という統計手法で補正している。本研究では、この AqoaPro を用いることで、評価結果の妥当性と信頼性を高め、活動の質を解釈している（文献 12）。

Probit 値範囲	活動の状態	活動と対象者の結びつきの強さ
~0.99	非常に悪い	極めて弱い
1.00~1.99	悪い	弱い
2.00~2.99	平均的	平均的
3.00~3.99	良い	強い
4.00~	非常に良い	極めて強い

注 7) FAST によるアルツハイマー型認知症の重症度のアセスメント（文献 13 p. 5）

1.正常	
2.年相応	物の置き忘れなど
3.境界状態	熟練を要する仕事の場面では、機能低下が同僚によって認められる。新しい場所に旅行することは困難。
4.軽度のアルツハイマー型認知症	夕食に客を招く取りつけたり、家計を管理したり、買物をしたりする程度の仕事でも支障を来す。
5.中等度のアルツハイマー型認知症	介助なしでは適切な洋服を選んで着ることができない。入浴させるときにもなんとか、なだめかかして説得することが必要なこともある。
6.やや高度にアルツハイマー型認知症	不適切な着衣。入浴に介助を要する。入浴を嫌がる。トイレの水を流せなくなる。失禁。
7.高度のアルツハイマー型認知症	最大約 6 語に限定された言語機能の低下。理解しうる語彙はただ 1 つの単語となる。歩行能力の喪失。着座能力の喪失。笑う能力の喪失。昏迷および昏睡。

注 8) 認知症高齢者の日常生活自立度（文献 14 p. 37）

ランク	判定基準	見られる症状・行動の例
I	何らかの認知症を有するが、日常生活は家庭内及び社会的にほぼ自立している。	
II	日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが多少みられても、誰かが注意していれば自立できる。	
II a	家庭外でも上記 II の状態が見られる。	たびたび道に迷うとか、買い物や事務、金銭管理などそれまでできたことにミスが目立つ等
II b	家庭内でも上記 II の状態が見られる。	服薬管理ができない、電話の対応や訪問者との対応などひとりで留守番ができない等
III	日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さがときどき見られ、介護を必要とする。	
III a	日中を中心として上記 III の状態が見られる。	着替え、食事、排便・排尿が上手にできない・時間がかかる、やたらに物を口に入れる、物を拾い集める、徘徊、失禁、大声・奇声を上げる、火の不始末、不潔行為、性的異常行為等
III b	夜間を中心として上記 III の状態が見られる。	ランク III a に同じ
IV	日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが頻繁に見られ、常に介護を必要とする。	ランク III に同じ
M	著しい精神状態や問題行動あるいは重篤な身体疾患が見られ、専門医療を必要とする。	せん妄、妄想、興奮、自傷・他害等の精神症状に起因する問題行動が継続する状態等

注 9) 本研究では、活動の実施場所を以下のように分類した。

1. 施設内	2. 施設周辺地域	3. 連携企業内
例えば： 介護施設のデイルーム or 就労専用コーナーにて活動する 	例えば： 介護施設の周辺地域で活動する 	例えば： 連携企業内に活動スペースを提供する 

注 10) 本論文では、高齢者からみた働く状態や、労働の内容を指す場合を「就労」

- と表記し、社会や企業からみた就労やその内容及び慣用的な使用方法に限り、「仕事」と表記している。
- 注 11) 本研究の職員配置は、1名の介護職員／ボランティアが見守り・サポートした高齢者の数として算出している。
- 注 12) 厚生労働省の「通所介護における介護職員の人員基準」では、利用者数が 15 名を超える場合、必要な介護職員数は「(利用者数 - 15) ÷ 5」+ 1 で算出される。よって、本研究では、調査対象施設の定員から、1名の介護職員が 5 名の高齢者を見守り・サポートすることを基準として分析する（文献 15 p.2）。
- 注 13) Mann-Whitney U test (マン・ホイットニーのユー検定) は、非パラメトリックな検定方法であり、データが正規分布に従わない場合には t 検定よりも高い有効性を示す。
- 参考文献**
- 1) K.You, K.Miura: Reality and Challenges of Work-related Activities among the Elderly Needing Care in Care Facilities, -Analysis Based on a Nationwide Survey and Interview of Elderly Care Facilities with Work-Related Activities-, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.89, No.820, pp.1009-1019, Jun., 2024(in Japanese) 尤瑠琦, 三浦研：介護施設における要介護高齢者の就労的活動の実態と課題、－全国の実施事業所へのアンケート・インタビュー調査に基づく分析－、日本建築学会計画系論文集、第 89 卷、第 820 号、pp.1009-1019, 2024.06 (DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.89.1009>)
  - 2) M.Kawamoto, E.Kameya: A Case Study of Employment Place and Community Place for Elderly People with Dementia, Architectural Institute of Japan, Architectural Planning and Design, pp.445-446, Sep.,2022(in Japanese) 川本真子, 亀屋恵三子：認知症高齢者の就労の場と地域の居場所に関する事例的研究、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.445-446, 2022.09
  - 3) A.Ito, K.Ohara, Y.Fujioka: A Study on Workstyle for the Elderly in Long-term Care Facilities, Architectural Institute of Japan, Architectural Planning and Design, pp.685-686, Sep.,2022(in Japanese) 伊藤礼佳ほか 2 名：高齢者介護施設における高齢期の就労に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.685-686, 2022.09
  - 4) K.Nagai, I.Kawasaki, S.Harada, K.Sagawa, S.Morimoto, N.Ogawa, Y.Ogawa: The Current State of Support for Ikigai Shugyo at Daycare Facilities with a focus on Specific Support Methods, J.Science of Labour, Vol.97, No.2, pp.48-62, 2022(in Japanese) 永井邦明ほか 6 名：通所介護事業所における生きがい就業支援の実態～具体的な支援の方法に焦点を当て～、労働科学、第 97 卷、第 2 号、pp.48-62, 2022 (DOI: <https://doi.org/10.11355/isljsl.97.48>)
  - 5) H.Akiyama: Envisioning Science and Society in the Age of Longevity, Kagaku, Iwanami Shoten(in Japanese) 秋山弘子：長寿時代の科学と社会の構想、科学、岩波書店、2010
  - 6) T.Tsuji: JST Research Project: Social Implementation of a System for Elderly People to Work for the Purpose of Living, 2013-2016(in Japanese) 辻哲夫：JST 研究課題：高齢者の生きがい就労システムの社会実装、2013-2016 (DOI: <https://doi.org/10.52926/JPMJRX13A2>)
  - 7) M.Ogawa, S.Nishida, H.Shirai: A Qualitative Study to Explore Ways to Observe Results of Engaging Activities in Clients with Dementia, Occupational Therapy International, Article ID 7513875, 8 pages, 2017 (DOI: <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/29097979/>)
  - 8) M.Ogawa, H.Shirai, S.Nishida, H.Tanimukai: Rasch Analysis of the Assessment of Quality of Activities (A-QOA), an Observational Tool for Clients With Dementia, Am J Occup Ther, 75(1)7501205040p1-7501205040p9, 2021 (DOI:<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/33399052/>)
  - 9) 厚生労働省老健局 事務連絡：若年性認知症の方を中心とした介護サービス事業所における地域での社会参加活動の実施について、平成 30 年 7 月 27 日、<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000340375.pdf>, 2024.06.10 参照
  - 10) 厚生労働省：指定居宅サービス等の事業の人員、設備及び運営に関する基準、平成 11 年 3 月 31 日（令和 3 年・一部改正）、[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=82999404&dataType=0&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=82999404&dataType=0&pageNo=1), 2024.06.10 参照
  - 11) A-QOA ホームページ：<https://www.a-qoa.com/>, 2024.06.10 参照
  - 12) M.Ogawa, H.Shirai, C.Sakamoto, S.Nishida: A-QOA(Assessment of Quality of Activities), Creates Kamogawa, 2022(in Japanese) 小川真寛ほか 3 名：A-QOA（活動の質評価法）ビギナーズガイド 認知症のある人の生活を豊かにする 21 審察視点と 20 支援ポイント、株式会社クリエイツかもがわ、2022
  - 13) 国立長寿医療センター 遠藤英俊：認知症の臨床評価について、平成 23 年 4 月 13 日、<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000018zii-att/2r98520000018zsi.pdf>, 2024.06.10 参照
  - 14) 厚生労働省ホームページ：[https://www.mhlw.go.jp/topics/2013/02/dl\\_tp0215-11-11d.pdf](https://www.mhlw.go.jp/topics/2013/02/dl_tp0215-11-11d.pdf), 2024.06.10 参照
  - 15) 厚生労働省ホームページ：<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000168705.pdf>, 2024.06.10 参照
  - 16) M.Ogawa, S.Nishida, H.Shirai: Assement of Quality of Activities(A-QOA), 2020.02.01(in Japanese) 小川真寛ほか 2 名：活動の質評価法マニュアル 第 3 版、認知症のある人の活動の質を高める研究会（QOA 研究会）

(2024 年 6 月 10 日原稿受理、2024 年 10 月 2 日採用決定)